

# 平成29年度(第68回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：19名 文部科学大臣新人賞：11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	すぎ いちかず 杉 市和	能楽師	「 <sup>ひがき</sup> 檜垣」ほかの成果
		みやぎ さとし 宮城 聡	演出家	「アンティゴネ」ほかの成果
	新人賞	しもり 詩森 ろば	劇作家, 演出家	「アンネの日」ほかの成果
映画	大臣賞	くろさわ きよし 黒沢 清	映画監督	「散歩する侵略者」の成果
		ながせ まさとし 永瀬 正敏	俳優	「光」ほかの演技
	新人賞	すだ まさき 菅田 将暉	俳優	「あゝ、 <sup>こうや</sup> 荒野」ほかの演技
音楽	大臣賞	こんどう じょう 近藤 譲	作曲家	「近藤譲 七十歳の径路」ほかの成果
		ぜんようじ けいすけ 善養寺 恵介	尺八演奏家	「善養寺恵介 尺八演奏会」ほかの成果
	新人賞	すぎやま よういち 杉山 洋一	指揮者, 作曲家	「第27回芥川作曲賞選考演奏会」ほかの成果
舞踊	大臣賞	さとう りほこ 佐東 利穂子	ダンサー	「トリスタンとイゾルデ」ほかの成果
		にしかわ みのすけ 西川 箕乃助	日本舞踊家	「ちよんがれー休」ほかの成果
	新人賞	ふくおか ゆうだい 福岡 雄大	バレエダンサー	「コッペリア」ほかの成果
文学	大臣賞	かない みえこ 金井 美恵子	小説家, 詩人	「カストロの尻」の成果
		まついえ まさし 松家 仁之	小説家, 編集者	「光の犬」の成果
	新人賞	うえだ たかひろ 上田 岳弘	小説家	「塔と重力」の成果
美術	大臣賞	すぎと ひろし 杉戸 洋	美術家	「杉戸洋 とんぼとのりしろ」展の成果
		にし の たつ 西野 達	現代美術家	「西野達 in 別府」展ほかの成果
	新人賞	いわさき たかひろ 岩崎 貴宏	アーティスト	「逆さにすれば、森」展の成果
放送	大臣賞	さかもと ゆうじ 坂元 裕二	脚本家	「カルテット」の脚本
	新人賞	かとう たく 加藤 拓	ドラマディレクター	「 <sup>くら</sup> 眩～北斎の娘～」の成果
大衆芸能	大臣賞	いしかわ さゆり 石川 さゆり	歌手	「45周年記念リサイタル」ほかの成果
		いりふねてい せんゆう 入船亭 扇遊	落語家	「入船亭扇遊 独演会」ほかの成果
	新人賞	とうげつあん はくしゆ 桃月庵 白酒	落語家	「桃月庵白酒25周年記念落語会的な」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	ほそかわ のぶひろ 細川 展裕	演劇プロデューサー	「 <sup>どくろじょう</sup> 髑髏城の七人」ほかの成果
	新人賞	くぼ た みどり 久保田 翠	NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表理事	「表現未満、実験室」ほかの成果
評論等	大臣賞	おむか としはる 五十殿 利治	美術史家, 筑波大学特命教授	「非常時のモダニズム」の成果
		さわらぎ のい 権木 野衣	美術批評家	「 <sup>しんびじゆつろん</sup> 震美術論」の成果
	新人賞	むらかみ かつなお 村上 克尚	日本学術振興会特別研究員	「動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理」の成果
メディア芸術	大臣賞	やまむら こうじ 山村 浩二	アニメーション作家	「山村浩二 右目と左目でみる夢」の成果
	新人賞	わだ えい 和田 永	アーティスト	「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」の成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成29年度(第68回)芸術選奨  
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	杉 市和	杉市和氏は、現在最も光彩ある音を奏でる能楽森田流の笛方である。その響きは文字通り音色と呼ぶにふさわしく、繊細にして鷹揚優美(おうようゆうび)、柔和にして一筋の芯を通す。氏の透明清澄(とうめいせいちょう)な笛の音によって、能舞台は確かな質感と詩情によって満たされ、観客は悠久の時間へといざなわれる。三老女の一つである「檜垣(ひがき)」をはじめ数々の大舞台を担い、極上の能楽空間を現出させたことは、賞賛に値する。
演劇	宮城 聰	「アンティゴネ」は、静岡市での初演後、伝統あるフランスのアヴィニオン演劇祭のオープニング作品として上演された。これは、日本はもちろんアジア圏の劇団として初めての快挙である。作品内容においても西洋的二分法「神か悪魔か」に対し「死ねばみな等しく仏」という日本的死生観を盛り込み、メイン会場である「法王庁中庭」という空間を存分に駆使した演出は、現地でも絶賛された。氏が地方の公共劇場を率いての成果としても特筆すべきことである。また、新作歌舞伎「極付印度伝 マハーバーラタ戦記」も意欲的な取組として評価された。
映画	黒沢 清	30年以上にわたるキャリアを誇る黒沢清氏は恐怖映画で台頭した。しかし、インテリジェンスと豊富な映画知識に裏付けされた作品群は常にジャンルの枠を突き破っていく。独自の空間造形と不穏な物語世界は見る者の不安をあおり、しかし安易な感情誘導を許さないストイシズムを持つ。「散歩する侵略者」は猟奇殺人映画がシュールなSFに転じ、更に生身のアクションを経てついには愛の重要性を正面から問うドラマになるという離れ業が実現された作品であり、黒沢芸術の真骨頂とも呼べる出来栄である。
映画	永瀬 正敏	河瀬直美監督の野心作「光」で、視力を失っていくカメラマンという、どこか映画画的とも言い得る困難な役柄を演じた永瀬正敏氏の繊細かつ放胆な演技は、平成29年公開の日本映画にとっても、また、彼自身の俳優人生の中でも特筆すべきものとなった。さらに、「ミステリー・トレイン」(同元年)以来となるジム・ジャームッシュ監督の「パターソン」(同29年公開)における短くも重要な出演場面は、氏が、真の日本人を演じられる国際俳優でもあることを改めて雄弁に示している。
音楽	近藤 譲	近藤譲氏は初期から一貫して「線の音楽」という独自の理念に基づき、透徹した思考による創作を楽曲に結実させてきた。聴くことによる音の分節化を音楽の本質と捉え、どのように音と音の関係性を構築できるかを厳格に追求する姿勢は作品のみならず、数々の著作でも示され、後進の現代音楽の作曲家、演奏家への影響は絶大である。彼の音楽観に共鳴する若い音楽家らが開いた70歳の記念コンサートは、近藤の美学と手法の結びつきを詳(つまび)らかにする優れた演奏で存在感を示した。
音楽	善養寺 恵介	平成29年は、善養寺恵介氏の充実した活躍が、ひととき印象に残る年となった。氏の演奏家としての原点は、尺八吹奏を禅の修行とみなし、深い精神世界を探究した虚無僧尺八にある。その真価が最も発揮されたのが「善養寺恵介 尺八演奏会」である。古典はもちろん現代作品にも通じる音楽の本質に迫る演奏が生み出した感動の記憶は、多くの人の心に刻まれたに相違ない。地歌筆曲(じょうそうきょく)の名手たちとの共演も数多く行い、合奏における尺八のあるべき姿を示し、豊かな表現の可能性を開いたことも特筆に値する。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	佐東 利穂子	佐東利穂子氏の「トリスタンとイゾルデ」におけるダンスは正に圧巻であった。屹立(きつりつ)する身体の絶え間ない変容は時空を越え、身体を使って表現するアーティストとして未踏の領域に入ったとすることができる。独自の振付言語と一貫した美意識を貫く勅使川原三郎氏と長年にわたり活動を共にしてきた氏が、身体に対する深い思考によって新たな地平を切り拓(ひら)いた成果は、「静か」「顔」にも鮮やかに現れ、大きな飛躍を見せた一年となった。
舞踊	西川 箕乃助	西川箕乃助氏は、西川流後継者として常に充実した舞踊活動を展開し、同世代の舞踊家のリーダー的存在である。故・花柳茂香氏が氏のために振り付けた「ちょんがれ一休」の再演は風狂の人・一休禪師への解釈が深まり、歌詞の素材・関の地蔵の話を収める仮名草子の世界を軽妙(けいみょう)洒脱(しゃだつ)な富筋の地歌に乗せて現代的に体现していた点で高く評価できる。また、家の芸である「正札附根元草摺(しょうふだつきこんげんくさずり)」の五郎のほか「女伊達(おんなだて)」でみせた歌舞伎舞踊の立役と女方の銜(てら)いのない技術も万全である。
文学	金井 美恵子	1960年代末に詩と小説の二つの分野に、ほぼ同時に鮮やかにデビューした金井美恵子氏は、その後の半世紀にわたって「書くことと読むことの謎に果敢に戯れる」という一貫した姿勢を保ちつづけてきた。「カストロの尻」は小説でありながら、詩やコラージュや批評や映画との臨界を意識的に作り出しつつ、それらを作品言語へと導き入れる。こうして、自身のこれまでの、優美にして挑発的な文学宮為全体の一つの頂となりえている。
文学	松家 仁之	松家仁之氏の「光の犬」は、その静謐(せいひつ)さ、その透明さにおいて、際立った達成を示しており、日本近代文学に類例がないとさえ思われる。作者と同世代と言っている姉弟の視点がほぼ中心をなすが、視点を固定することなく、三世代の生き方が克明に描かれている。とりわけ生死の描き方の鮮やかさには目を見張るものがあるが、しかし作品全体に漲(みなぎ)っている静謐(せいひつ)さ、透明さを崩すものではない。現代人の魂の行方を探究して見事というほかない。
美術	杉戸 洋	杉戸洋氏の個展「とんぼとのりしろ」は、表情のある壁面と天井の高い広大な空間を特徴とする東京都美術館の地下ギャラリーを会場に、額装された通常の絵画とともに、常滑焼のタイルで作られた巨大な立体作品や、空間に対する注釈のようなインスタレーションを展示することで、建築空間との対話を試みたものである。絵画の手触りや色彩と近似した感覚的体験を、現実空間の中で具現化することによって、空間の絵画化を実現した同展は、絵画の定義の更新を含意するものであり、絵画の新しい可能性を感じさせた。
美術	西野 達	西野達氏は、都市のランドマーク的な彫像や構築物を仮囲いで覆い、リビングルームや実際に宿泊が可能なホテルに変容させる作品により、国際的に高い評価を得ている。平成29年は各地で大型作品を発表する中、個展形式による芸術祭を委ねられた別府(大分県)では、屋外インスタレーションを市内各所に展覧し、温泉の「地獄巡り」ならぬ「芸術巡り」を巧みに演出した。ユニークな発想と大胆な仕掛け、公共空間に介入し日常的な観念をくつがえそうとするその作品は、積極的に観客を取り込み、アートの力を改めて印象付けるとともに、芸術祭に新たな地平を切り開いた。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	坂元 裕二	<p>坂元裕二氏のドラマは常に、社会の片隅で生きづらい人生を不器用に生きる人間たちに寄り添ってきた。「カルテット」では、様々な過去を持つ四人の男女が心を通わせながら人生の不可逆性を受け入れていくプロセスが、サスペンス風の味付けとは裏腹に細やかに描かれた。分かりやすいストーリー展開に頼らず、陰影に富む人物造形と巧みな台詞(せりふ)によって深みのあるドラマを構築する手腕は、現在のテレビドラマ界随一と言っても過言ではない。</p>
大衆芸能	石川 さゆり	<p>確かな歌唱力と、女優としても定評のある表現力を存分に生かし着実な歩みを続ける石川さゆり氏。芸能生活45年の節目に催された記念リサイタルでは、太鼓芸能集団「鼓童」や邦楽奏者らを多数迎え、自らも義太夫(ぎだゆう)を語りながら歌手としての「これまで」と「これから」を凝縮してみせた。歌謡曲の伝統をきっちり受け継ぐだけでなく、若い音楽家たちとの共演アルバムの制作に取り組むなど新たな挑戦も忘れない姿勢に敬意を表したい。</p>
大衆芸能	入船亭 扇遊	<p>平成29年2月2日、「入船亭扇遊 独演会」(東京・国立演芸場)での落語「鼠穴(ねずみあな)」は、絶品の芸だった。兄弟の確執をべとべとさせる手前で押しとどめ、江戸の冬の一場面を輪郭もはっきりと描き切った。日頃聞かせる落語の質はどれも高く、「牡丹灯笼(ぼたんどうろう)」、「付き馬(つきうま)」など、豊作の年だった。古典落語に受け狙いのくすぐりを差し込むことが落語の悪しき潮流になっているが、氏は余計なことを一切入れない。それでいて、きちんとおかしい。高く評価されるべきである。</p>
芸術振興	細川 展裕	<p>細川展裕氏は、平成29年3月に開場したIHIステージアラウンド東京のこけら落とし公演、劇団☆新感線による「髑髏城(どくろじょう)の七人(しちにん)」をプロデュース。客席自体が回転し、周囲360度の舞台で物語が展開する、世界で2番目の没入型エンターテインメント施設という新形態の文化施設と社会との橋渡しに、連日満席のロングラン公演として成功した。また氏が代表を務める(株)ヴィレッジは、同16年には我が国で初めて、演劇を映像化し映画館で上映する「ゲキ×シネ」の企画をプロデュース。演劇と映画のリンケージにおける先駆的的事业に取り組む、文化と社会の接点を拡充、我が国文化の振興に寄与した。</p>
評論等	五十殿 利治	<p>五十殿利治氏の研究は、ロシアアヴァンギャルドを視野に入れたことで、西欧美術との関係を重視してきた日本の近代美術史研究の可能性を大きく広げた。この度の著作「非常時のモダニズム」は、時代を少し下って1930年代に目を向け、暗い時代と見なしがちな短絡を戒める。戦争へと向かう時代に美術家がどのように「前向き」に表現と取り組んだかを丹念に追跡し、モダニズムが国境を越える国際性を有しながらも、彼らの生きる社会が国家による統制を強めていくさまを浮き彫りにした。</p>
評論等	榎木 野衣	<p>東日本大震災をはじめ、日本が歴史的に地震や津波、火山噴火や台風など自然災害に繰り返し見舞われてきたことは知られる。榎木野衣氏の「震美術論」は、そんな災害列島である我が国の地学的特殊性に着目し、その歴史的経験を丹念に追いながら、明治維新以降に導入され規範となった欧米の美術の観念や制度を問い直すことを試みる。美術館の在り方や作家の作品世界に批評的視点で真摯に向き合い、揺れる大地の上で営まれるこの国の美術を再考する刺激的な論旨は傾聴に値する。</p>

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	山村 浩二	<p>日本アニメーション100年と言われる記念すべき年でのアニメーション作家・山村浩二氏の授賞は大変意味のあるものである。渋谷ユーロスペースで新作として上映された「サティの「パレード」」と「怪物学抄」は世界的なコンペティションで注目された。短編アニメーションで「世界のヤマムラ」と高く評価されているにも関わらず、多くの領域をまたぐメディア芸術という括(くくり)の中で待ち望まれた受賞とも言える。現役作家として第一線で活動しつつ、作品そのものが後進への力強いメッセージとなっており、短編アニメーションの若い制作者を牽引(けんいん)している。</p>

平成29年度(第68回)芸術選奨  
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	詩森 ろば	<p>詩森ろば氏は台頭著しい女性劇作家たちの中にあつて、企業の内幕ものから社会問題を追及する作品まで幅広い題材を取り上げ、緻密な取材を経て、優れた戯曲を書いている。「アンネの日」は生理用品の開発にかかわる女性たちの姿を、その背景を含めて丁寧に描きつつ、性差やマイノリティーをめぐる問題を鮮やかに浮き彫りにした。「海の凹凸(おうとつ)」は公害に関する自主講座を舞台に、水俣病問題に取り組む人間模様を鋭い筆致で描いた。</p>
映画	菅田 将暉	<p>菅田将暉氏は若手随一の人気俳優であるが、単なる一過性の人気に留(とど)まる人ではない。「あゝ、荒野(こうや)」では主人公が生きる人生の壮絶さをその身体性によって実感させつつ、感情の深みも見事に体現していた。演技の質、役柄の幅の広さへの柔軟性など、演技者としての実力も十分あることを、コメディからシリアスドラマまで、様々なジャンルの作品への出演でそれぞれに発揮し、作品にパワーやエネルギーを注入した。今後の更なる活躍が期待できる。</p>
音楽	杉山 洋一	<p>杉山洋一氏は、イタリア・ミラノに拠点を置きつつ、国内外で幅広く活動を展開し、我が国においても、殊に同時代音楽界に欠くべからざる存在としての評価を確立してきた。とりわけ、平成29年には、ヨーロッパにおける活躍に加え、若手作曲家の作品の特質を余すところなく聴き手に伝えた「第27回芥川作曲賞選考演奏会」や、大家2人の世界を巧みに描き分けた「作曲家の個展Ⅱ 2017」の指揮で、余人をもって代え難い大きな成果を挙げた。さらに、作曲の分野でも、演奏家たちとの固い絆(きずな)を感じさせる作品を発表した。今後の更なる飛躍も期待される。</p>
舞踊	福岡 雄大	<p>福岡雄大氏は、早くから男性的で高度な舞踊技術、明朗で好感の持てる個性で注目を集めてきたダンサーである。近年は表現力や主役としての風格の点で急成長を見せており、平成29年は所属する新国立劇場バレエ団の全プログラムに主演。「 Coppélia 」フランチ役の洒脱(しゃだつ)さ、「ジゼル」アルベルト役の高貴な悲劇性をはじめ、役柄の深い理解によって作品を牽引(けんいん)し、舞台全体の成果を高めるような名演が相次いだ。日本のバレエ界をリードする存在として、更なる飛躍が期待される。</p>
文学	上田 岳弘	<p>インターネット上のコミュニティーサービスに深く入り込み、現実社会と仮想空間、いつしか二重の生を負い始めている現代の若者たち。本当の自分の意思はどこにあるのか。誰がそれを決めるのか。本作では、そうした極めて今日的な難題を、あるビジネスマンの行動により鮮明に浮かび上がらせている。阪神・淡路大震災を経験し、その後育った世代の精神史を内包する。俯瞰(ふかん)的な作品世界は、高い評価に値する。今後の筆者の活躍が期待される。</p>
美術	岩崎 貴宏	<p>岩崎貴宏氏は平成29年のヴェネチア・ビエンナーレ日本代表として日本館で「逆さにすれば、森」展を開催した。弱々しい糸で建築物を作るなど常識的な風景や物の存在に疑問を投げ掛ける氏の展示で特に印象的だったのは、日本館の床の丸い穴の下から来場者が頭を出して覗(のぞ)くインスタレーション。室内で眺めた時と全く違う風景を見た来場者は視点の多様性の存在を痛切に自覚する。多様な価値観に臨む中で必要な視点の持ち方を世界に示した意味は大きい。</p>



部門	受賞者名	贈賞理由
放送	加藤 拓	加藤拓氏はドラマ「眩(くらら)～北斎の娘～」において、極めて優れた演出力を示した。主演である北斎の娘・お栄を演じた宮崎あおいを始めとして多彩な俳優陣の演技の引き出し方は見事である。またこのドラマの根幹といえる「光と影」を表現した美術・技術を結集した統率力も見逃すことはできない。「坂の上の雲」、大河ドラマ「八重の桜」「精霊の守り人」などで培った演出力を生かして、最近では余り制作されなくなった一話完結の単発ドラマでこの成果を出したことを高く評価したい。
大衆芸能	桃月庵 白酒	現今の落語界は、演者それぞれの自由な演出で、多くの実力ある若手が輩出している。桃月庵白酒氏は、その独特の視線からの導入部に始まり、落語本編にあっても、伝承された主題に登場人物が切り口を変えて話す言葉で、原話の深みを観客に再発見させる。高座数は多い中、特に芸歴二十五周年記念の会での「井戸の茶碗」で、その個性ある警句も残しつつ、意表を突くだけでなく、骨太な展開を見せた。今後も数多くの演題の研鑽(けんさん)に大きな期待を持てる存在である。
芸術振興	久保田 翠	久保田翠氏は、自ら設立した福祉施設等を拠点に、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがいを乗り越えて人間本来の「生きる力」「自分を表現する力」を見つめる場を提供し続けている。「表現未満、実験室」は、知的障害のある人たちの表現をアートとして扱うことで、障害者の潜在能力や新たな可能性を提示してきた活動を、浜松駅前のスペースで展開することで、人間とは何か、アートとは何かという本質的な問い掛けを私たちにより強く投げ掛けるものだった。
評論等	村上 克尚	村上克尚氏の「動物の声、他者の声―日本戦後文学の倫理」は、クツツエー、アガンベン、デリダらの思想を踏まえて、人間性を剥奪(はくだつ)された「動物」の表象を戦後日本文学に探った画期的な論考であり、その発想の斬新さと分析の鋭さが高く評価された。主権＝主体の論理の暴力性を深く認識するのみならず、他者への倫理的応答を探るその手法は、従来の近代的主体を巡る議論の地平を大きく超え、日本文学研究の未来に光を当てるものと言ってよいだろう。
メディア芸術	和田 永	和田永氏は、多摩美術大学在学時から一貫して、消えゆくテクノロジーに対するノスタルジーと、自身のイメージーションを交錯させることで、どこにも(あるけれど)ない、まだ見ぬ楽器と、それをういたパフォーマンスを実践してきた。その営みは、想像的であると同時に批判的でもあり、新しいテクノロジーの登場によって、時としてもっと大切なものが失われてしまうことがある、という技術至上主義の危険性をも指摘する。今回の受賞においては、こうした長年のコンセプトを社会と結び付けるオープンな試みとしての「エレクトロニコス・ファンタスティコス！」(通称:ニコス)が高く評価された。正に文部科学大臣新人賞の名にふさわしい、これからまだまだ伸びしろのある才能だ。

平成29年度(第68回)芸術選奨  
選考経過

## 平成29年度(第68回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞として12名、文部科学大臣新人賞として13名が推薦された。第一次選考審査会では慎重な議論の末、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞5名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞候補者5名の業績について改めて精査、白熱した議論が重ねられた。現代演劇の候補者の中から、演出家の宮城聰氏が、静岡初演後にフランスのアヴィニョン演劇祭に招聘された「アンティゴネ」と、新作歌舞伎「極付印度伝 マーハーバーラタ戦記」と、斬新で国際的な両作品の演出で評価されて選ばれた。伝統芸能では、今最も光彩のある音を奏でることのできる能楽笛方として杉市和氏が能「檜垣」ほかの成果で選出された。文部科学大臣新人賞では、候補者5名をめぐり、更に熱い議論が交わされた。その結果、近年、秀作を次々と発表し、平成29年も「アンネの日」など話題作を手掛けた詩森ろば氏を選定した。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員、推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として8名、文部科学大臣新人賞候補者として9名の推薦があった。第一次選考審査会では、各賞共に全ての候補者について、それぞれの選考審査員が推薦する候補者の業績、推薦理由について述べ、推薦委員の候補者についても、その業績、推薦理由を確認した。それを基に、選考審査員によって議論が繰り広げられた結果、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞6名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について、様々な角度から、更に慎重かつ精細な議論が白熱した。その結果、文部科学大臣賞には、一見荒唐無稽な題材をエンターテインメントとして楽しませつつアートの域に引き上げた「散歩する侵略者」の監督黒沢清氏と、「光」ほかの演技によって高いレベルに到達した俳優永瀬正敏氏を選出した。文部科学大臣新人賞には、「あゝ、荒野(こや)」ほか様々な作品において圧倒的な存在感を示した俳優菅田将暉氏を選出した。</p>
音楽	<p>音楽部門では、文部科学大臣賞及び文部科学大臣新人賞の選考を、どちらも共に、二次にわたる議論により行った。文部科学大臣賞に選考審査員及び推薦委員によりそれぞれ推薦された候補者は、5名及び8名、計13名であった。第一次選考審査会では、各々についての様々な角度からの検討が行われ、まず、5名への絞り込みが行われた。一方、文部科学大臣新人賞に関しては、選考審査員及び推薦委員からの推薦によるそれぞれ7名及び6名、計13名が候補となり、同じく慎重な検討の結果、4名が第二次選考審査会の対象となった。</p> <p>第二次選考審査会においては、各候補の多岐にわたる業績に関する厳正かつ活発な議論を経て、文部科学大臣賞に、「近藤譲 七十歳の径路」ほかの成果により近藤譲氏、及び「善養寺恵介 尺八演奏会」ほかの成果により善養寺恵介氏を選定、また、文部科学大臣新人賞には、「第27回芥川作曲賞選考演奏会」ほかの成果により、杉山洋一氏が選ばれた。いずれも、平成29年における抜きん出た成果として高い評価を受け、選考審査員全員の満場一致による選定であった。</p>
舞踊	<p>舞踊部門は、文部科学大臣賞13名(選考審査員から8名、推薦委員から5名)文部科学大臣新人賞13名(選考委員から7名、推薦委員から6名)の推薦があった。第一次選考審査会の結果、それぞれの賞の各々5名が第二次選考審査会に残された。</p> <p>両次共に緻密かつ活発な議論が交わされ、殊に文部科学大臣賞の第二次選考審査会は長時間に及んだ。そのような中で候補者は3名に収斂(しゅうれん)し、日本舞踊の西川箕乃助氏が年間の活動と斯界(しかい)における牽引的な役割が共に評価されてまず決まった。もう1名については更に議論が続き、平成29年の成果を改めて丹念に審議、国際的な活動や将来性において一步抜きん出た、ダンサーの佐東利穂子氏が選ばれた。</p> <p>文部科学大臣新人賞は、福岡雄大氏が同29年の圧倒的な舞台成果に多くの推薦を得て選出に至った。</p>

## 平成29年度(第68回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として13名、文部科学大臣新人賞の候補として13名が挙げられた。第一次選考審査会では、慎重な議論を尽くし、文部科学大臣賞は8名(小説家5名、詩人1名、歌人1名、俳人1名)に文部科学大臣新人賞は5名(小説家5名)に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会での議論を踏まえ、候補者全員のこれまでの業績や今回審査対象となった作品について、更なる検討が行われた。その結果、文部科学大臣賞には、無数の映像や小説、記憶や夢によって紡がれた甘美で自在な物語「カストロの尻」の作者金井美恵子氏と、北海道の架空な町を舞台に百年にわたる一族三代の生のきらめきを描いた堂々たる長編「光の犬」の作者松家仁之氏の2名がふさわしいという評価を得た。また文部科学大臣新人賞には、精細な議論が重ねられた末、17歳の冬の阪神大震災で恋人を喪(うしな)った男が、20年後の現代に生きる苦悩と心の揺れを描いた表題作を含む短編集「塔と重力」の作者上田岳弘氏への贈賞が決まった。</p>
美術	<p>美術部門では選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補者17名、文部科学大臣新人賞の候補者19名が推薦された。第一次選考審査会では選考審査員から推薦された候補者は推薦した選考審査員が、推薦委員から推薦された候補者は専門領域を同じくする選考審査員が業績と推薦の理由を説明した。選考の結果、第二次選考審査会の対象に文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞候補4名が選ばれた。</p> <p>第二次選考審査会は美術部門の分野が多岐にわたることから、選考方法について様々な意見が出された。慎重な審査の末、文部科学大臣賞に「杉戸洋 とんぼとのりしろ」展(東京都美術館)など、絵画とその場や空間の在り方を深く探求してきた杉戸洋氏、「西野達 in 別府」など、公共空間を中心にユニークな発想と大胆な仕掛けで、スケール感のあるプロジェクトを発表した西野達氏が選ばれた。また、文部科学大臣新人賞には、第57回ヴェネチア・ビエンナーレの日本館での個展「逆さになれば、森」などで、日常品を素材に一元的なものの見方を揺さぶり、現代社会に対するクールで批判的な眼差(まなざ)しを示した岩崎貴宏氏が選ばれた。</p>
放送	<p>放送部門の選考に当たって、選考審査員と推薦委員から推薦された文部科学大臣賞13名、文部科学大臣新人賞13名の候補者につき、選考審査員による第一次選考審査会が開かれ、平成29年に放送された候補者の番組を精査し、議論を重ねた。第二次選考審査会では絞られた候補者(プロデューサー、ディレクター、脚本家、俳優)の過去の作品を含めた総合的実績、才能も勘案し最終決定の要因とした。同29年は特にドラマ作品に秀逸な候補者が揃(そろ)い、その結果文部科学大臣賞には「カルテット」の脚本をした坂元裕二氏、文部科学大臣新人賞には「眩(くら)ら」～北斎の娘～の演出をした加藤拓氏に贈賞を決定した。</p> <p>文部科学大臣賞の坂元氏は社会の急激な変化の中、既成の社会構造に対し、これまでとは異なる生き方を選択する若者たちのありのままの姿を自然な台詞(せりふ)で描いた表現が高い評価を受けた。文部科学大臣新人賞の加藤氏はドラマの演出、技術、美術の伝統的な在り方を意識しつつ、自分の表現方法を果敢に導入し、正統と異端の世界を独創的に作り上げたことが評価を集めた。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では選考審査員と推薦委員より、歌手、演芸、語りのジャンルから、文部科学大臣賞15組、文部科学大臣新人賞12組の候補が挙げられた。第一次選考審査会では、それぞれの候補者についての推薦理由を、書類に基づいて精査し、文部科学大臣賞7組、文部科学大臣新人賞4組に絞り込んだ。結果を見ると、推薦委員からの候補がそれぞれに2組ずつあった。絞り込み過程では、各候補者について活発な情報交換がなされ、情報をという候補については、次回までに各選考審査員が十分な資料検討を行うことなどを約し、次回で論議を尽くせるよう計らった。第二次選考審査会では、これらを基に候補の実績、活動の幅の広さ、また年度賞の視点から、個々の選考審査員が絞られた候補について更に検討を行い、対象となる公演・作品の評も交えながら考察をした。実績と節目のリサイタルが要素となり、総合的観点から歌手では石川さゆり氏、また、多くの落語会で地道に芸を研鑽(けんさん)した入船亭扇遊氏が文部科学大臣賞に決定した。文部科学大臣新人賞は、経験、活動の方向性、今後への期待などについて活発な意見交換の結果、桃月庵白酒氏に決まった。</p>

## 平成29年度(第68回)芸術選奨 選考経過一覽

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門では、「新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者」や「複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界(しかい)に大きな影響を与えている者」、また、「他部門に該当しない文化活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者」が対象となっているが、平成29年も、文部科学大臣賞候補に14名、文部科学大臣新人賞候補に13名と多数が推挙された。第一次選考審査会では活動資料を基に各選考審査員から推薦意見があり、検討した結果、文部科学大臣賞候補を4名、文部科学大臣新人賞候補を5名に絞った。第二次選考審査会では、各候補者について選考審査員から追加調査報告も踏まえて、慎重に検討を重ねた結果、文部科学大臣賞には「髑髏城(どくろじょう)の七人」ほかの成果で細川展裕氏を、文部科学大臣新人賞には「表現未満、実験室」ほかの成果で久保田翠氏を選出した。</p>
評論等	<p>評論等部門では、第一次選考審査会において、文部科学大臣賞は23名の推薦された候補者から6名(美術3名、文学2名、映画1名)に絞り込まれた。いずれも労作であるが、他部門の選考審査員や推薦委員からの推薦が重なる候補者は少なかった。文部科学大臣新人賞は、13名の推薦された候補者から6名(映画2名、文学2名、美術1名、芸能1名)に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞は最終的に3名が残ったが、更に議論が重ねられて、埋もれた資料を掘り起こして1930年代美術に肉迫した「非常時のモダニズム」の五十殿利治氏、東日本大震災のあとにいかにして美術や思想は可能かを真摯に問いかけた「震美術論」の榎木野衣氏を選考するに至った。文部科学大臣新人賞は、人間と動物との境界を手探りしながら、戦後文学の新たな読みの可能性を示した「動物の声、他者の声 日本戦後文学の倫理」の村上克尚氏が、圧倒的な支持を集めて選考された。いずれも、真摯な研究態度に裏付けられた大作である。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、漫画、アニメーション、メディアアート、ビデオゲームを含むエンターテインメント作品などを対象としている。芸術選奨において新興である本部門は新しい芸術表現を積極的に評価してきた。平成29年は絵本作家、イラストレーター、キャラクターデザイナーなどが候補者として挙げた。表現は多岐多彩であり、選考審査員はそれぞれの評価軸を交差させながら慎重に議論を進めていった。第一次選考審査会においては年次の業績を重視し、文部科学大臣賞候補者は12名から6名に、文部科学大臣新人賞候補者は13名から5名に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会においては、第一次選考審査会での議論を踏まえた上で、メディア芸術部門で顕彰されるべき作家像なども討議された。最終的に文部科学大臣賞には、現役作家として第一線で活動しつつ、作品そのものが後進への力強いメッセージとなっている点が高く評価され山村浩二氏が選出された。また文部科学大臣新人賞には、蘇生(そせい)された家電製品を用い様々なコラボレーターと共に「奇祭」を実現した和田永氏が選出された。</p>

# 芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日  
文化庁長官裁定  
一部改正 平成11年 5月13日  
一部改正 平成13年 1月 6日  
一部改正 平成15年 4月 1日  
一部改正 平成16年 4月 1日  
一部改正 平成19年 12月26日  
一部改正 平成24年 4月 1日

## 1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

## 2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

## 3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

## 4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

## 5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

# 芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日  
文化庁次長決裁  
一部改正 平成13年 1月 6日  
一部改正 平成15年 4月 1日  
一部改正 平成16年 4月 1日  
一部改正 平成19年12月26日  
一部改正 平成24年 4月 1日

## 1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

## 2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
  - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
  - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
  - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

## 3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成29年度(第68回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
いのうえ 桂	水戸芸術館 A C M劇場 芸術監督	いしい 彰	放送作家
おおしま 秀夫	日本芸術文化振興会プログラムオフィサー	おかむら 美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長, 早稲田大学文学学術院教授
おおたに 節子	成城大学教授	こうたけ 徹也	評論家, 日本大学名誉教授
このみ 瑞男	共立女子大学名誉教授	しげのぶ 浩	(株)テレビマンユニオン会長
たかはし 豊	演劇評論家, 毎日新聞社客員編集委員	たけやま 洋	脚本家
たちばな 恵子	演劇評論家	にしむら 与志木	JCA西村オフィス代表, フリープロデューサー
はやし 尚之	日刊スポーツ新聞社文化社会部編集委員	ふじた 真文	法政大学社会学部教授
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
あおき 眞弥	キネマ旬報編集長	おおとも 浩	演芸研究家, 文筆家
うたがわ 幸洋	映画評論家	おぎた 清	梅花女子大学名誉教授
おかじま 尚志	東京国立近代美術館フィルムセンター参事	なかむら 真規	演芸プロデューサー
たねだ 陽平	美術監督	あきはら 健太	音楽評論家
ねがし 吉太郎	映画監督, 東北芸術工科大学長	はない 伸夫	演劇・演芸評論家
ひらの 共余子	映画史研究者	ふるかわ 綾子	国際日本文化研究センター特任助教
やまぶ 吉彦	東京国際映画祭プログラミング・ディレクター	わたなべ 寧久	演芸コラムニスト, 演芸評論家
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
おかだ 暁生	京都大学教授	えだがわ 明敬	東京芸術大学教授
おかべ 眞一郎	明治学院大学教授	おおとも 良英	音楽家
おぼた 恒夫	昭和音楽大学特任教授	さかい 誠	日本芸術文化振興会演劇プログラムディレクター, 演劇制作アドバイザー
かとう マリ	武蔵野音楽大学講師	ちよぎ 誠司	東京大学教授
さいとう 裕嗣	東京文化財研究所客員研究員	とみやま 省吾	日本アカデミー賞協会事務局長
しらishi 美雪	武蔵野美術大学教授, 音楽評論家	ひらび 克彦	東京芸術大学美術学部長, 岐阜県美術館長, アーティスト
ちがいに 和子	(公社)日本芸能実演家団体協議会 実演芸術振興部・企画室長	よしと 光宏	ニッセイ基礎研究所研究理事
【舞踊部門】		【評論等部門】	
うみの 敏	東洋大学教授	あかさか 憲雄	学習院大学教授
おの 晋司	(公財)横浜市芸術文化振興財団チーフプロデューサー, 横浜赤レンガ倉庫 1号館館長	かわけ 祥一郎	東京大学大学院教授
あした 純二	日本芸術文化振興会顧問	きのした 直之	東京大学教授
ながの 由紀	舞踊評論家	たまむし 敏子	武蔵野美術大学造形学部教授
まるち 美恵子	日本大学教授	ほりえ 敏幸	早稲田大学文学学術院教授
みやじ 政夫	演劇評論家	むらやま 匡一郎	映画評論家
【文学部門】		わたなべ 裕	東京大学大学院人文社会系研究科教授
おぼた 真理子	読売新聞編集委員	【メディア芸術部門】	
さわ 好摩	俳人	いだけ 和敏	立命館大学映像学部教授
しまだ 雅彦	作家, 法政大学国際文学部教授	おかくら あおみ	パリ日本文化会館展示部門アーティスティックディレクター, 美術評論家
すずき 文彦	八重洲ブックセンター元顧問	くぼた 晃弘	多摩美術大学教授
ながた 和宏	京都産業大学総合生命科学部教授, 京都産業大学タンパク質動態研究所長	こいで 正志	東京造形大学教授
ひらいて 隆	多摩美術大学教授	ささもと 純	筑波大学名誉教授
みつら 雅士	文芸評論家	じんの内 利博	武蔵野美術大学教授
【美術部門】		みなもと 太郎	漫画家, マンガ研究者
いとう 正伸	国際交流基金ジャポニスム事務局部長, 審議役(美術担当)	【部門内五十音順】	
おがわ 敦生	多摩美術大学教授		
おしむら 正明	茨城県近代美術館館長		
かねこ 賢治	茨城県陶芸美術館館長		
あづま 和世	(株)妹島和世建築設計事務所		
しま 敦彦	金沢21世紀美術館館長		
なごり 明	(公財)五島美術館副館長		
ふくだ 美蘭	画家		
みなみ 雄介	愛知県美術館館長		
もりやま 明子	武蔵野美術大学教授		



平成29年度(第68回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
新井 浩介	日本芸術文化振興会プログラムオフィサー	青木 淳	青木淳建築計画事務所代表取締役
太田 耕人	京都教育大学副学長	青木 野枝	彫刻家
小田島 恒志	早稲田大学教授	加藤 泰弘	東京学芸大学教授
河野 孝	文化ジャーナリスト、演劇評論家	唐澤 昌宏	東京国立近代美術館工芸課長
古城 十忍	(公社)日本劇団協議会常務理事	黒川 公二	佐倉市立美術館学芸員
児玉 竜一	早稲田大学教授	榎木 野衣	美術批評家、多摩美術大学教授
濱田 元子	毎日新聞学芸部編集委員	菅原 教夫	読売新聞東京本社編集委員
坂東 亜矢子	演劇評論家	住友 文彦	アーツ前橋館長、東京芸術大学大学院准教授
水川 まりこ	伝統文化ジャーナリスト	立島 恵	(公財)佐藤国際文化育英財団 佐藤美術館学芸部長
安澤 哲男	世田谷パブリックシアター 劇場部長	中野 嘉之	日本画家、多摩美術大学名誉教授
【映画部門】		中村 一美	多摩美術大学教授
尾形 敏朗	映画評論家	橋本 優子	宇都宮美術館主任学芸員
奥村 賢	いわき明星大学教養学部教授	藤崎 圭一郎	東京芸術大学教授
北小路 隆志	京都造形芸術大学准教授	眞住 貴子	国立新美術館主任研究員・教育普及室長
古賀 太	日本大学芸術学部教授	森 司	アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長
近藤 孝	読売新聞東京本社編集局文化部次長	山崎 剛	金沢美術工芸大学教授
杉原 永純	山口情報芸術センター キュレーター	山本 和弘	栃木県立美術館シニア・キュレーター
関口 裕子	(株)アヴァンティ・プラス代表取締役	【放送部門】	
暉峻 創三	映画評論家	入江 たのし	メディアプロデューサー
中山 治美	映画ジャーナリスト	音 好宏	上智大学教授
原田 健一	新潟大学教授	塩田 純	NHK第一制作センター文化・福祉番組部 エグゼクティブ・プロデューサー
【音楽部門】		武田 和	(公財)川喜多記念映画文化財団代表理事
石田 麻子	昭和音楽大学教授	谷川 建司	早稲田大学政治経済学術院客員教授
伊東 信宏	大阪大学大学院教授	丹羽 美之	東京大学准教授
大谷 紀美子	相愛学園学園長	濱崎 好治	(公財)川崎市生涯学習財団 川崎市市民ミュージアム副館長
薦田 治子	武蔵野音楽大学教授	水田 伸生	日本テレビ放送網株式会社執行役員、制作局専門局長
塚原 康子	東京芸術大学教授	三原 治	放送作家、日本大学芸術学部放送学科非常勤講師
新美 徳英	作曲家	渡部 実	映画評論家
野平 一郎	東京芸術大学教授	【大衆芸能部門】	
藤田 隆則	京都市立芸術大学教授	太田 博	ジャーナリスト
堀内 修	音楽評論家	香取 良彦	洗足学園音楽大学教授
横原 千史	音楽評論家、兵庫県立大学講師	関谷 元子	音楽評論家
【舞踊部門】		辻 則彦	フリーライター
阿部 さとみ	舞踊評論家	長井 好弘	読売新聞東京本社編集委員
上野 房子	ダンス評論家	布目 英一	横浜にぎわい座チーフプロデューサー
岡見 さえ	舞踊評論家、慶応大学非常勤講師	畑 律江	毎日新聞学芸部専門編集委員
唐津 絵理	愛知県芸術劇場シニアプロデューサー	前田 憲司	寄席芸能史研究者
鈴木 英一	早稲田大学演劇博物館招聘研究員	松尾 美矢子	演芸ライター
松 あつこ	舞踊ジャーナリスト	油井 雅和	毎日新聞記者
多々納 みわ子	舞踊家、(公社)日本バレエ協会理事	【メディア芸術部門】	
野崎 益子	(株)日本舞踊社代表取締役	岩下 朋世	相模女子大学准教授
村山 久美子	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師	さそう あきら	漫画家、京都精華大学教授
守山 美花	尚美学園大学非常勤講師	高谷 史郎	アーティスト
【文学部門】		土居 伸彰	(株)ニューディアー代表取締役
安藤 礼二	多摩美術大学美術学部准教授	畠中 実	N T T インターコミュニケーションセンター主任学芸員
城戸 朱理	詩人	浜村 弘一	株式会社G z ブレイン代表取締役社長
玄侷 宗久	作家、福聚寺住職	原 久子	大阪電気通信大学総合情報学部教授
佐藤 洋二郎	作家、日本大学芸術学部教授	東泉 一郎	クリエイティブディレクター・デザイナー
仲 寒蟬	佐久市立国保浅間総合病院地域医療部長	氷川 竜介	アニメーション特撮研究者、明治大学大学院客員教授、NPOアニメ特撮アーカイブ理事
南木 佳士	作家・医師	米光 一成	ゲーム作家
野崎 欽	東京大学教授	【部門内五十音順】	
藤島 秀憲	歌人、エッセイスト		
松永 美穂	早稲田大学教授		
柳 宣宏	函嶺白百合学園中学高等学校教頭補佐		